

「 ドバイの摩天楼で分かった日本農業の価値 」

(協同組合通信/山椒弾)

平成 20 年 12 月 2 日

今年も原油に振り回され通し。春先からの暴騰でアラブの産油国とOPECは、消費国に対し鼻息荒く、油の出し惜しみ操作で世界経済を牛耳ろうと画策。燃油高騰の直撃で世界各地の港で、漁船が出漁できず、我が国でも全漁連が一斉休漁のデモを行なった。

コーランの教えにない傲慢な態度に業を煮やしたアラブの神の鉄槌なのか、秋口になって想定外の局面に産油国は大慌て。あれよあれよと瞬く間に、原油価格は暴落、世界中で原油がだぶつき、価格は約3年半ぶりに、一時1バレル50ドルを割りこんだ。想定外の暴落に、たまたま、OPECは10月29日に、カイロで会合を開き、追加削減の緊急協議。ついに、現代の砂上の楼閣といえる「ドバイの大規模開発の見直し」にまで、事態は急展開中。

アラブ首長国連邦のドバイ首長国は、政府や政府系企業が抱える債務が800億ドル(約7兆6千億円)であることを初めて公表。オイルダラーを当て込んだ借入れをテコに進めてきた高層の摩天楼などの大規模開発を見直す方針に追い込まれ多。世界を欺く如き摩天楼は夢幻の大ピンチ。オイルダラーで、世界中の富を集め、世界一のミラクルワールドを夢見た王様は、砂漠の夜空に煌く無数の星と月を眺めて悄然と何想う。太古から千夜一夜の地域。おとぎ話ではなく短い栄華が現実となりつつある。世界経済はグローバル化の名の下に魔物にとりつかれ、日本の大企業も、こぞって社運をかけてこれらのプロジェクトに参加しているらしい。砂漠の屋敷はつとに知られているが、歴史は繰り返す。

米国発の金融危機は、世界に未曾有の経済の大混乱をもたらしている。ポスト米国の核と想われた中東も腰砕け。ロシアの原油依存の経済発達も黄色が灯り、オイル頼みはあつというまに雲散霧消の気配。

アメリカ型拝金と一攫千金システムは地に落ち、栄華を誇った殿様企業のビッグ3さえ、消滅の危機。正々堂々と地道に、身の丈にあった経営をする高品質の我が国農業の安全・安心作物の重要性が改めて見直されている。日本農業の正念場。

(気象情報システム株式会社 高津 敏)